

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsuushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsuushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

カールマルクスと向坂逸郎 (1)

原野人：2

マルクス・向坂と斎藤幸平

向坂逸郎 著

『マルクス伝』を読む (二)

蓑輪 泰臣：4

「新型コロナウイルス感染症」

本村 充：6

の一考察 (その2 下)

自民総裁選から総選挙へ

国労上野反合研：8

―安倍・菅政権で奪われた生活と権利、民主主義を取り戻そう―

唯物史観の否定から歴史改ざん

滝野 忠：10

―斎藤君はマルクスをどう歪めているか (四)―

読者からのおたより

..... 13

刊 旬 社 会 通 信

NO.1346

二〇二一年十月一五日号

二〇二一年十月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

カールマルクスと向坂逸郎（1）

マルクス・向坂と斎藤幸平

『マルクス伝』を味読しよう

向坂はあの三池闘争のさなかに、『マルクス伝』（新潮社版『マルクス・エンゲルス選集』13）を書いた。出版されて間もなく60年を迎える。ほとんど同時期に『マルクス経済学の基本問題』（岩波書店）も著している。

『マルクス伝』は、後に新潮社から版權を譲り受けて、社会主義協会が出版している。そこでは第13章として『資本論』が論じられ、後日の『マルクス経済学と私』（社会主義協会出版局）に『資本論』の全体像」として収録されている。

『マルクス経済学の基本問題』では、第三篇『資本論』の展開、Ⅲ「資本主義的蓄積の一般的法則」――いわゆる窮乏化論について――を書いている。

『マルクス伝』ではマルクスが向坂に乗り移っているかのごとくである。向坂に初めて書くことのできたマルクス伝である。我々は透徹した力強さと新しさをいつまでも失わないマルクスやエンゲルスやレーニンの論述を読むときと同じように、向坂を読むことができる。しばし『マルクス伝』の言うところを聞いてみよう。

「われわれはマルクスイズムの思想としての構造の土台は『ドイツ・イデオロギー』でぎざかれたと考えることができる。しかし、その完成は『資本論』によって成し遂げられた、といわなければならない。むろん一八四八年前後に著された『哲学の貧困』や『賃労働と資本』によって『資本論』のあらましは出来上っている。階級および階級闘争の事実が経済の発展と必然的な関係におかれている。ここではもはやプロレタリアートの窮乏はただ窮乏として社会変革の原動力とされているのではなく、生産諸関係の必然として取扱われている。しかし、『資本論』における「資本主義的蓄積の一般的法則」に示されたように、剰余価値の法則がどのようにして資本主義的蓄積を推しすすめ、資本主義的蓄積の一般的法則が、どのようにして階級闘争を進展させるかの精緻なる論理は見当らない。『資本論』で初めて我々は、資本主義自体の機構の発展が社会主義実現の必然を含んでいるのを、精確な論理をもって知る。社会主義の実現が人間の希望や願いとしてでなく、社会発展の法則の必然として理解されるのである。社会主義ははじめて言葉の精密なる意味において科学となっている。資本主義の中に社会主義社会の必然的な物質的要素が作り出されている。さらに、この物質的要素の上に社会主義社会を創造する階級も、創造しうる歴史的素質をもって生れている。プロレタリアートまたは近代的労働者階級がこれである。資本主義の発展、いにかえると資本主義的蓄積の一般的法則は、資本主義の存するかぎり、この二つの要素に社会主義の準備としての歴史的性質を完成させている。この資本主義的蓄積の一般的作用の必然性を労働者階級が理解し、この必然的法則に適應し行動するかどうかに、歴史的変革、資本主義の社会主義への転化がかかっている。労働者階級のこの変革の行為は、その自由である。しかしこの自由な行為は、法則の必然性に添ってなされるのでなければ実現されることはない。したがって、例えば、資本主義的蓄積の一

般的法則に反して、資本主義の中に小じんまりした共有社会をつくることは、実現させ、発展させるために、どんなに努力しても亡びる外はない。われわれの自由なる行為は絶対的に自由なのではない。つねに相対的であって、必然の法則に添い、これに適応する以外には、自由に目指した、即ちわれわれがつくろうと願望した社会は実現しない。」(284〜285頁)。

齋藤幸平君の理屈を予測したかの批判である。

『資本論』全体系の核心

「資本主義的蓄積の一般的法則」の重要さを理解できない小ブルジョア学者を諷めるがごとく、向坂はこの法則の中に、「『資本論』全体系の核心」を確認する。

「『資本論』の」第一巻は資本の生産過程を取扱い、第二巻は資本の流通過程を、第三巻は資本の総過程を取扱っている。第一巻は、第二巻、第三巻で取扱われた過程を規定するものとして生産過程を探求している。それはマルクスの基本的思想、即ち史的唯物論の立場から当然のことといわなければならぬ。：『資本論』は「近世社会の経済的運動法則」を明らかにするとマルクスは自ら述べている。労働者階級の運命は、極めて具体的な諸条件のもとに決せられることはいうまでもない。しかし、労働者階級の歴史的運命が、基本的に生産過程において決定されていることも、史的唯物論の立場からまた当然である。資本主義的蓄積の一般的法則も、より具体的には第三巻で説かれた諸要素の中に現れ、労働者階級の窮乏化もまたそうであろうことは明らかである。しかし、やはり基本的には資本主義的蓄積の一般的法則として剰余価値の法則の直接の展開として論ぜられても少しも間違いではないばかりでなく、このような取扱いで却ってその基本的合則性が明白となる。複雑なこまかい副次的な諸事情から抽象されているからである。第一巻で資本主義の基本的矛盾を明らかにする。ここで労働者階級の歴史的運命も基本的に明らかにする。第二、第三巻は第一巻で説かれた資本主義の基本的矛盾がどのように、より具体的に現れるかを説明するだけである。

資本主義を資本主義たらしめているという意味で、基本的な法則である剰余価値の法則は、資本主義的蓄積の原動力である。資本主義的蓄積の一般的法則は、資本主義がその限度内でどこまで発展するかを示している。しかし、その発展は資本主義そのものを否定する要素をその中に成長させる。『資本論』は「近代社会の経済的運動法則」を明らかにするという。資本主義である限り、このような経済的運動法則は繰返される。しかし、この運動法則そのものが資本主義を否定する要素をつくり出す。資本主義がその限度内で発展しているかぎり、それは資本主義の量的発展である。しかし、この量的発展は、資本主義の質的転換を準備しつつある。私は、『資本論』第一巻、特にその資本主義的蓄積の一般的法則の中に、この質的転換の要因をみるものがある。したがって、この法則を特に論ずることは、『資本論』全体系の核心を取り出して示すことになる。同時に、階級および階級闘争が生産関係の発展と必然的な関係において認識されることになる。質的転換の要素はこの関係の中にある。」(293〜294頁)。

齋藤君にはこの核心が理解できない。

(原野人)

向坂逸郎著『マルクス伝』を読む(一)

― 二人の先輩へ ―

国労新幹線の先輩二人から、「マルクス伝完読しましたか」との問いと、『資本論』学習会3回目に入りました。マルクス伝の後は何を？」との年賀状が届きました。

思想の宝物 完読

『マルクス伝』多くの諸先輩方とはつくに完読されていることと存じます。私は、昨年、1回目の完読です。分厚い本の『マルクス伝』、若いころの私には、本棚の飾りでありませんでした。読む気にさせたのは、共産党宣言の勉強ですね。数人の党会議での定例学習会『共産党宣言』を勉強中ですが、『共産党宣言』のレポートをするときに手にした本が『マルクス伝』でした。小さな字で分厚い本、読む前から気が萎えますね。はじめは、レポートのために、ところどころ読み漁っていました。が、せっかくだから最初から読もうという気持ちになり、読み始めました。読み始めると、どうゆうことか、止まることができなくなりました。うきうきした気持ちでこの本と向き合うことになりました。ウソではありません。

「ここは大切なところ鉛筆で線引き」と言いながら進み、完読後に振り返ると、大半の文章に線が引かれていました。それだけ、私にとってはすごい本、思想の宝物「宝箱」のように思える本へと変身してしまいました。

こんなすごい本を今まで本棚のかざり扱いしていたとは、罰が当たりそうです。新幹線の先輩に『マルクス伝』の内容を伝えようと思うのですが、トッピングする箇所がなく、「すべてがおいしい思想だよ」と伝えたい。しかし、改めて読み返す機会をいただいた先輩たちに、自分の勉強もかねて、二人の先輩に語りかけるとしてしました。

その前に、マルクス・エンゲルス・レーニン・向坂逸郎の思想に自信が持てなくなった人たち、または、「新しい思想」に興味をしめしはじめた「いい手を考え始めた」人たちが目立ち始めた昨今、その方々に、次の文を届けたい。

『過ぎし・愛しき日々』(向坂ゆき遺稿集)より

【勉強、勉強、また勉強、勉強のみが奇跡を生む】

どの時代も向坂は、「そのうち俺たちが必ず勝つ」といつてよくよ悩んだりしたことはありませんでした。戦前九大を追放されたとき、その後人民戦線事件で留置場に入れられたときも、「いずれ、正しいものが勝つ」という信念でいたように思います。いまは内外共に激動の世の中ですが、「先生がいらしたら、何とおっしゃるだろうか」というお手紙を私も幾つかいただいております。向坂の申し上げることは決まっている。「元に戻って、古典を一生懸命勉強しろ」と言うでしょうね。

向坂は生前、武者小路実篤の次のような言葉を好んで用いていました。「勉強、勉強、また勉強、勉強のみが奇跡を生む」。そればかりでなく、本人からすると「マルクス主義は必ず勝利する」という確信は不動のもので揺るがないと思います。「いま社会主義体制がどんどん崩壊しているのは、間違った社会主義を遂行してきたから

だ」。向坂はこう言うに違いありません。

ですから、「元に戻って、古典を見つめ直さなければいけない」と言うにきまっています。とにかく、歴史を辿（たど）ってみてもまた研究の成果をもつてしても、再び資本主義に逆戻りするなんてことは有り得ないという確信を強く持っていました。」（169〜70頁）

【最近の世界情勢は当然わが日本をも巻き込んで、向坂達の目指す方向とは逆にぐいぐい進んでゆくかに、一見思われます。しかし、原始共同体から歴史の跡を辿ればまことに長い長い時をかけて進みつ戻りつ少しづつ進んで今日に至ったのでした。資本主義から社会主義へ移るのも五、六十年の短年月で達成できるものではないのかもしれない。向坂は、日本の社会主義のせめて玄関口なりと見たいものと願う一方で、将来世の情勢がわれわれに不利に転回しないという保証は何もない。常に覚悟だけはしなければいけないと、私には申していました。

今やずい分遠のいてしまった「光」、しかしその光を決して見失うことなく、極めて困難な道ながら歩みつづける同志が少なからずあります。そうした人々を信ずることの出来る、そしていづれの日にか必ず来るであろうよき時代を信ずることの出来る私は幸せだと思えます。】（同、205頁）

「マルクシストになるとは」

向坂逸郎は『社会主義』（社会主義協会発行）特別号（1985年5月5日）、向坂逸郎追悼の『イギリスにおける労働者階級の状態』の著者解説で―

【「ブルーノ・パウエル、エドウガ・パウエル、エクペルト・パウエルという『青年ヘーゲル派』の中心人物の思想を批判した。

それは、同時に自分たちの到達点を自己諒解（りようかい）する意図のものであった。二人の共著『聖家族』である。マルクスとエンゲルスは、ここで『ヘーゲル左派』の思想を脱皮して、明らかに唯物論に達し、社会主義者としてあらわれている。

しかし、彼等は、すでに社会主義者ではあったが、まだマルクシストではなかった。彼等は、唯物論者ではあったが史的唯物論者ではなかった。彼等は、すでに社会主義を実現する力として、資本主義の中にプロレタリアートを発見していた。さらに、プロレタリアートの窮乏化が、社会主義の必然性として理解されている点で、これまでの一切の社会主義者をこえていた。しかし、マルクス・エンゲルスが、マルクシストになるためには、プロレタリアートの窮乏化が、どのように資本主義の経済的メカニズムの展開の必然的結果であるかが明らかとならなければならなかった。社会主義の実現が、たんに窮乏化を媒介（ばいはい）とする階級闘争の結果であるというだけでなく、階級および階級闘争が、その社会の経済の発展と必然的な関係にあることを理解することによって、はじめてマルクシズムが成立し、社会主義が科学となる。】

『マルクス経済学の方法』（向坂逸郎著 33頁）でも「マルクスがマルクシストになるには、一般に社会的発展を必然的にする物質的生産力と生産関係の矛盾という原理が発見されなければならない。したがって、プロレタリアートの『非人間化』と階級闘争の必然がいわば経済学的に語られなければならない。」と述べています。

先輩、『マルクス伝』を結論的に言えば、貫かれている思想はやはり、唯物史観、史的唯物論のものの方考え方と言えますかね。どうですか。

12月『共産党宣言』の勉強会で、64頁から65頁の22行やりました。そこに書かれていたことは、「わがブルジョアは、彼らのプロレタリアの妻や娘を自由にすることでは満足しない。彼等は自分たちの妻を互いに誘惑して、それを何よりも喜びとしている。ブルジョアの結婚は、実際には妻の共有である。・・いずれにせよ、現在の生産関係の廃止とともに、この関係から生じる夫人の共有もまた、すなわち公認及び非公認の売淫（ばいいん）もまた消滅することは自明である」と書かれました。

（養輪 泰臣・つづく）

「新型コロナウイルス感染症」の一考察（その2下）

なぜ「人前に」

ここでもう一度自然の中で当たり前に存在するウイルスが、なぜ人前に出てきたのかを考えて見ることにする。「新型コロナウイルス」は、コウモリに由来する（自然宿主）と言われている。一般的に、コウモリは寿命が5〜50年とほとんどの小型の哺乳類よりもはるかに長く、多種類存在するので、ウイルスが存続するには適すると言われている。コウモリは集合して生活するためウイルスは容易に広がる。また、空を飛ぶ唯一の哺乳類であり飛行距離が長く、ウイルスが遠くに運ばれる可能性もある。ウイルスの自然宿主としてのコウモリは、注目されている存在である。

通常はコウモリがウイルスに感染しても症状を出すことはなく（不顕性感染）、ウイルスは共存してコウモリの間で感染を繰り返している。コウモリ由来ウイルスの特徴として挙げられるのは、まず多くが先に述べたRNAウイルスであり、変異ウイルスが生じやすく動物種を超えて感染しやすくなることである。また、多くのコウモリ由来感染症は、コウモリからヒトへ直接感染するのではなく、中間宿主を介して感染する。SARS(サーズ)の原因であるウイルスは、キクガシラコウモリからハクビシンなどの動物を介してヒトに感染したと考えられている。

本来、野生動物を宿主としていたウイルスはその生息域で宿主動物と共存していたと考えられる。そして、ヒトが感染したということは、ヒトがその野生動物の生息域に踏み込んだということを意味している。なぜなら、何らかの「接触」がなければ、ウイルスに感染しようがないからである。ヒトが自然環境を破壊してリゾート開発を行ったり、農場開発を行ったことによる野生動物の生活環境領域の減少、「食物連鎖」のバランス崩壊と野生動物の減少等々。その結果、野生動物と共存していたウイルスが種を維持するために宿主域を拡大することとなり、ヒトや他の動物に感染するようになったと考えられる。つまり人為的な要因が大きく作用していると推測される。「新型ウイルス」の発生源や経路を特定し、その原因を解明することは、今後の「ウイルス対策」にとつては極めて重要となってくるであろう。

「共存（共生）関係」

しかしなぜウイルスは宿主動物と「共存(共生)関係」にあるのだろうか。「共存(共生)」ということは、それらが相互に作用し、お互いに影響しあっているということである。様々な研究者による最近の研究結果で、明らかになってきたことがある。それは、ウイルスとの共生が、宿主のゲノム深化や生体機能に有利に働く場合もあるということである。生物のゲノムDNA上には、ウイルスに由来する遺伝配列が存在することはすでに知られている。近年の研究では、ゲノムに組み込まれたレトロウイルス(内在性レトロウイルス)由来遺伝子が、哺乳類における胎盤形成や感染防御に関与するなど、宿主細胞で機能遺伝子として利用されていることが明らかとなっている。これは、ウイルスの正体が、先に述べた「さまよえる遺伝子」(ある細胞の遺伝要素の一部が細胞から飛び出したものである)であることを実証するものかもしれない。なぜなら相互の遺伝子要素の何らかの共通性、相関性がなければ、それらが定着し、機能遺伝子として働くということは考えにくいからである。その後の研究によって、様々な宿主生物のゲノム上に、ウイルス遺伝子の一部が存在することが明らかにされており、生物の進化や多様性増大には、ウイルスの関与が大きいと言われている。

ヒトの場合も例外ではない。東京大学大学院農学生命科学研究科の今川教授らの研究グループは、「約四千万年前に霊長類に感染・固定化したヒト内在性レトロウイルスW (HERV-W) は胚の母親への着床時以降に栄養膜合体の形成にシンシチン(Syncytin)として利用される。この細胞融合能をもつ Syncytin はヒトだけではなく、げっ歯類、ウサギ、ウシやヒツジなどの反芻動物や他の動物種のゲノムに存在することが明らかにされつつある。ところが、各動物種の Syncytin は同じウイルスを起源に持つものではなく、異なったウイルスによる遺伝子配列にも関わらず、同様の細胞融合能を有する」(註・人を含む哺乳類の妊娠時の胎盤の形成にはシンシチン1と呼ばれるタンパク質が必要)との発表をしている。つまりヒトの妊娠、出産に関わる胎盤形成と胎盤機能システムには、ウイルスが大きく関わっているということである。

「コロナ対策」 今後

さて、今後についてである。今までの考察から導き出される課題について列記することにする。

まず第1に、「新型コロナウイルス感染症」による死者が多数出ている現状の中では、感染者数の減と重症化を防ぐ医療体制の確立である。抗ウイルスワクチンの接種の普及が、その促進を促すであろう。

第2に、今後の「新ウイルス」対策を見据えた体制確立を急ぐことである。そのためにはまず、今回の「新型コロナウイルス」に関するあらゆるデータ収集、解析を徹底することである。その発生源や経路を特定し、その原因を解明することは、今後のウイルス対策にとって極めて重要となってくる。

第3に、ウイルス研究の拡大と豊富化に向けた保障体制の確立である。近年、ウイルスは、人類にとっても過去、現在に至る過程で様々な影響を与えてきたことが明らかになっている。このシステムをさらに深く解明し、応用、利用することが可能になれば、将来的には「難病」(特に遺伝子が関係する)に関わる何らかの治療に役立つことも考えうる。

第4に、ウイルスがヒトに及ぼす影響の一般化である。もちろん、自然界には様々なウイルスがあり、その影響を一般化するのとは、とてつもない時間と労力を費やすことである。しかしウイルス一般が、ヒトに対して及ぼす何らかの共通性があるはずである。その共通性を究明することができれば、より効果的なワクチンの開発や、治療法、あるいは、医療以外の様々な分野への応用も可能となるであろう。

乞うご期待「その3」

最後に、あくまでも私の主観的な「一考察」の第2弾である。確固とした数値で出さなければ、実証され、科学的なものになり得ないことも確かである。しかし、ある物事に対して考察するということは、自分自身の存在を確認することでもある。脳を使い、手を使い、今までのあらゆる知識と表現方法を検索、吟味し、さらに新しい知識を得るために調べ検証していく。その過程は、なぜ今自分がここにいるのかを改めて認識させてくれる。

私が文章を書く場合、最初から構図を決めて書くことはしない。本当はその方が整理され要点もわかりやすいのだろうが、たぶん私の性分なのである。とにかく頭に浮かんだことをパソコンに打ち込んでいく。だからどう展開していくかは、私自身にもわからない。パソコンを打ちながら、何らかの道が見えてくることもある。そこが多分私の思考がたどるべき道なのである。

「その3」も書くつもりでいる。今度は、人間の肉体そのものからウイルスを考察してみたいと思っている。
(2021年2月15日 本村 充)

自民総裁選から総選挙へ

― 安倍・菅政権で奪われた生活と権利、民主主義を取り戻そう ―

感染爆発

7月12日以降、緊急事態宣言を出しつつ放しにしながら、多くの国民の反対の声に背を向け、東京五輪・オリンピックが強行された。菅政権は、予想された通りの感染爆発「第五波」を招き（全国で7月28日、新規感染者9583人で過去最多、ピークは8月20日の2万5876人）、内閣支持率は28%まで落ち込んだ。

自民党は、すでに7月16日に立憲民主・共産・社民ら野党4党から出された臨時国会召集要求を、閉会中審査を理由に受け入れず、ワクチン難民の若者の不安をよそに、総選挙日程をにらんだ自党の総裁選にかかりつきりになった。自民党は、誰が総裁になっても同じ、憲法の改悪を目指し、独占資本の利益を守るための政党である。この9年間の安倍・菅政権によって奪われた、国民の生活と権利、民主主義を、9月8日に成立した野党4党と市民連合の共闘の力で取り返していこう。

「コロナ」無策

菅内閣の支持率低迷は、コロナ対策より経済再生にこだわる自公政権への不信だった。7月下旬、菅政権が頼みとしたワクチンは供給不足に陥り、政府は逼迫する病床に、専門家への相談もせずに「中等症・軽症患者は自宅療養」へと方針転換（8月2

日)した。多くの国民・専門家から、医療にアクセスできない「自宅放置」の不安、亡くなる人が増え、家庭内等で感染を広げる懸念などの批判が沸き起こった。加えて、コロナに感染した妊産婦の入院受け入れ態勢の脆弱さも浮上(8月19日)。

政府の新型コロナ対策分科会の尾身茂会長は8月25日、東京五輪開催は国民に「矛盾したメッセージを与え、政府が専門家より楽観的な状況分析を行った」と批判。東京都が思い付きのように始めた若年層対象の「予約なしで受けられるワクチン接種」は8月27日の初日から希望者が殺到して混乱した。

「戦後最大の緊急事態」(立憲枝野代表)にもかかわらず、国会を開かない菅内閣への国民の不信は日ごと高まり、8月22日の横浜市長選での大敗と岸田文雄氏の総裁選出馬に焦った菅総理は、自民党役員人事(二階幹事長切り)で切り抜けようとしたが、すでに総選挙に浮足立つ自民党議員の菅離れは進み、現職総理が総裁選に立候補を断念するという結果になった(9月3日)。

次々と馬脚をあらわす、自民党総裁「候補」―我々はもうだまされない!

総裁選は、一言で言えば、安倍・二階らを背景にした党内の権力闘争である。高市早苗氏は、安倍的憲法改悪や「敵基地攻撃」論を受け継ぎ好戦的、まるで武家・軍人の妻である。「異端児」と言われ「反原発」を唱えていたとされる河野太郎氏は、安倍との面会后、ころっと原発再稼働容認に転向。一方、安倍にいいように使われてきたのに安倍の支援を期待する岸田文雄氏は、「森友学園」問題の再調査を一転して否定。自民党は岸田が言うような「幅広い選択肢を示すことができる政党」であるはずがなく、権力を得るためには他人をも踏み台にし、主張も変え、何でもありの政治屋の集まりではない。

政治は誰のためにあるべきなのか、真剣に考えるときだ。ありもしない近隣諸国の脅威を煽り立てて軍需産業を富ませるのか、「トリクルダウン」(「富裕層が豊かになることで貧困層にも富がしたり落ちる」というウソ、例としてアベノミクス)の幻想をふりまき、さらなる儲けを企てようとする大資本のためにあるのか、それとも、一人ひとりでは防ぎようもない災害・感染症・失業などからの被害を最小限にするための備えを万全にし、額に汗して働く者が本当に報われる政治にしていけるのか、今回のコロナ禍が改めて気づかせてくれたと言えるような政治の変革を勝ち取ろう。

「みどりの窓口」閉鎖など、駅の合理化が提案される

6月9日、JR東日本東京支社から、営業職場における人減らし合理化の提案がされた。前回までは上野支部関係を中心に記載していたが、今回からは、東京支部全体について記載する。

会社は、「チケットレスを含むICT(情報通信技術)の進展による利便性の向上」などを「みどりの窓口」閉鎖の理由にしているが、MV型自動券売機では買えない切符や、定期券の払戻し、びゅう商品券での支払いなどは、今もって「みどりの窓口」が必要であり、利用者(特に、機械に慣れない高齢者)大きな不便をかけるものである。

【神田駅・浜松町駅・大森駅・尾久駅の合理化内容の詳細については割愛します。】
東京支社は委託駅においても、大塚駅・御徒町駅における出札窓口閉鎖(ともに11

月1日実施)を計画している。国労としては、賃金問題だけではなく、合理化問題でもJESSに交渉窓口を開けさせることが課題になる。

保線・信号における「拠点配置体制」の見直し提案

7月30日、JR東日本東京支社から、地上設備故障発生時における復旧拠点の配置体制見直しが提案された。会社はその理由として、①設備強化等により輸送障害の発生件数を低減させてきた ②出勤実績を勘案し、生産性向上・コストダウンを図りながら最適な体制にする、としている。実施は10月1日。

なお、同日JR東日本本社でも東日本本部に対し、「首都圏における拠点配置体制の一部見直し」の説明があり、「JR社員自らが異常時対応を行うことで、故障の原因特定や仮復旧の処置など異常時の対応力のレベルアップに繋げる」「優先復旧線区及び山手線とそれ以外の線区に区分し、一部の拠点を廃止する」としている。(国労東日本「業務連絡報」No.1593)

本事業は、2006年10月、支社から提案された「輸送障害発生時の復旧時間短縮に伴う拠点の増配置等」についての改訂であり、当時、外注の拡大による事故の多発、下請け労働者の労働条件の劣悪化、JR社員の技術継承の問題、作業の安全確保などを指摘していた(「討議資料」No.16)。「保線・信号の現行体制と見直し後体制の詳細については割愛します。」

今回、保線については、ア、即応体制強化のため、上野拠点を存続させること。イ、通常業務を終えた「夜間作業者」を引き続き「拠点对応者」とする事は長時間労働になる。臨時の業務に備えるためにも、JR社員の宿直者を複数名配置する体制にするべきである。

(国労上野反合研事務局討議資料No.221(2021年9月14日より抜粋)

唯物史観の否定から歴史改ざん

— 斎藤君はマルクスをどう歪めているか (四) —

自然と人間、社会

唯物論の根本は、歴史における究極の規定要因は、直接的な生命の生産と再生産であるとの世界観です。どんな社会でも、人間の労働なくして、成立し存続することはありえません。人間の労働は、自然に存在しながら、人間を自然から独立させるものです。

自然の土台の上でなければ、存在しない人間社会を、自然に結びつけ、自然の法則に適応しながら、自然から相対的に独立させ、自然をもたなかった人間の歴史をつくりあげ、発展させるのが人間の労働なのです。したがって、自然と社会の調和なくして人間社会の存続はありません。

こんなことは唯物論者であったマルクスやエンゲルスには自明のことです。しかし、唯物論を否定する斎藤君はマルクスの思想をなにごと一つ理解することはできません。したがって、重箱の隅をつつくことしかできないのです。

反省

ぼくは、いま月5回、学習会をやっています。コロナで不自由な勉強会ですが、「楽しむ方法」を見つけたながら、ノンビリとシタタカに学び合っています。

ノンビリとシタタカというのは、学習会仲間が、テキストの予習はどうせん、その周辺にある歴史、文化、そしてその最高の文献であり、解釈であり、向坂逸郎の学習です。今号で掲載した『マルクス伝を読む』はそのいい例です。

これは同じように、国労上野反合研で『唯物史観』（労大新書、川口武彦著）を学ぶ友人たちは①斎藤本の誤りは唯物史観の否定、したがって、資本主義社会の基本矛盾が「生産力と生産関係」にあることに目をそむけること、②唯物論は自然と人間、労働そして社会の全関係をふくみます。したがって、唯物論を否定する斎藤君のマルクス批判は、いちやもんにすぎないということ、③上野反合研の仲間はいしたものです。今の自民党はむろん、私たちの身近な組織でも誤りを認めたいしません。しかし、上野の仲間は斎藤君にひかれそうになっている自身の弱さを見つめ直すにはよいことと、さらに学習にはげもうと呼びかけているところです。

反動

近代の社会主義は、有産者と無産者の階級対立、生産のうちに支配している無政府状態―恐慌と貧乏物語―を目の当たりにした結果として生まれました。18〜19世紀、牧歌的な封建的秩序は、イギリスから始まった古い土地共有制や個人所有制を破壊する、ブルジョアの所有制への変革、革命が社会を一举に揺れ動かしたのです。

歴史はインテリゲンチヤがすべて社会主義者になったかのようなはげしい動きだったと伝えます。

当時の「社会主義者」たちの主張は、「全人類の解放」でした。社会主義の実現は「労働者階級の搾取からの解放」、「そのための労働者階級による権力の獲得」のマルクス・エンゲルスのイデオロギーが、天才的な3人の社会主義者を「空想的」としたのです。

歴史は実証家です。唯物史観は社会主義社会実現への導きの糸です。適応を誤れば時代は暗転します。1990年代前後の社会主義世界の崩壊です。マルクス主義の原理・原則の誤りではありません。現に資本主義の基本矛盾―私有財産制度と社会的分業―から生まれた諸矛盾の蓄積、累積は、「資本主義ではダメ、新しい社会のシステムが必要」との声を日々大きくしているではありませんか。

こんな時、斎藤君は気候変動・環境危機を「全人類の危機」とし、「全人類の解放」とマルクスを歪め、否定することで求めているのです。これは、旧い時代への反動です。「通信」読者から、向坂逸郎の『マルクス経済学の方法』から、こんなお便りがありました。

『資本論』は、資本主義社会という社会形態で、人間労働とその配分がどのような行われるかに対して、精緻（せいち）をきわめた分析をしている。『資本論』がどんな抽象的な議論をやっているところでも、このような人間労働の意義からはなれることはない。『資本論』のどの部分を読むときも、このことを忘れないで読むことで

ある。太陽のように明らかな事実は、時として忘れることがある。この事実を忘れた議論は、どのように「偉い」大学教授がやっても、われわれになんの値打もない。」（マルクス経済学の方法Ⅱ 向坂逸郎）

まちがった議論は解説する必要はありません。正しい主張を明らかにすべきということです。おっしゃるとおり、間違った考えには、向坂先生のように、雀でさえも大砲で粉碎すべきなんです。

ウソの連発

ウソ① 晩期マルクスの大転換 斎藤君の発明である「晩期マルクスの大転換」（151頁）のデッチ上げは笑止千万、いずれぐるぐと回って返って、斎藤君を地獄のサターンが襲います。「マルクスは変わった」、エンゲルスは、マルクスが残した遺稿、二巻、三巻と四巻（剰余価値学説史）を編集、出版した時、エンゲルスが「マルクスの考えを『歪め』『見えにくく』『したと歪めるのです』」

ウソ② マルクスとエンゲルスは一体 友情について、古代ギリシャ、ローマにはじまって書かれた本は少なくありません。だれもがあげるのがマルクスとエンゲルスとの友情です。マルクスとエンゲルスは1845年12月、「ライン新聞」編集部で知りあつて、マルクス死の1883年まで、著作、家族、生活のありとあらゆる部門で交友を深めあつていきます。

エンゲルスは、マルクスに『資本論』を完成させたかったです。自分の仕事はマルクスに資本論を書かせることと、貧困にあえいでいたマルクスを物質的、精神的に支えつづけたのです。往復書簡は1844年10月はじめのエンゲルスからマルクスへの第一号に始まり、マルクス没の1883年1月まで、1546通にもなります。

エンゲルスが「犬商売」をやめ、マンチェスターからマルクスと同じロンドンに住むようになったのは1870年です。この時からマルクスとエンゲルスは、毎日、会つて友情を深めます。彼らの間に隠しごとはない一つとしてありませんでした。マルクスとエンゲルスは「一体」だったのです。往復書簡にすべてが語られています。

ウソ③ エンゲルスはマルクスを歪めた 斎藤君が「現在読まれている『資本論』の第二巻、第三巻は、盟友エンゲルスがマルクス没後に遺稿を編集し、出版したものにすぎない。そのためマルクスとエンゲルスの見解の相違から、編集過程で、晩年マルクスの考えていたことが歪められ、見えにくくなっていることも少なくない」（151頁）、「エンゲルスは『資本論』の体系性を強調しようとするあまり、『資本論』の未完の部分がどこにあるかを隠蔽してしまった。」（152頁）と、これまたかつてに、ここではマルクスとエンゲルスの友情を歪め、恥じることはありません。ここまできると馬鹿に付ける薬はない、と相成ります。

ウソ④ 斎藤君の不勉強 斎藤君のデタラメさはまだまだ続きます。マルクスが『資本論』を完成できなかったのは、「理論的転換があまりにも大きすぎた」から、とい

うようにです。これが斎藤君の妄想の結果であることは前項にくわしく述べたとおりです。マルクスの理論が、労働者運動に根づいた時、なぜ「転換」しなければならぬのでしょうか。理論矛盾です。

ウソ⑤ 人間失格だ もっとひどいのはマルクスとエンゲルスを仲たがいさせ、己の妄想をふくらませ喜びにひたっていることです。ここまでくると、太宰じやありませんが「人間失格」です。具体的にはこうです。

改ざん

斎藤君は唯物史観を否定し、歪曲し生産力至上主義、進歩史観と改ざんしてしまいました。こんなのでらばうな歴史観では社会主義の必然性、哲学者にとつては必須の知識である自由と必然、否定と否定の弁証法は理解できるはずがありません。

ですから、この人は「端的にいえば」(152頁)、「ものすごく大雑把にまとめた」(150頁)と、ほんとうに大雑把でちつとも学者らしくありません。かつてにマルクスの思想を改ざんし、「世間に普及している理解によれば」と「進歩史観」のレッテルをはりつける、無責任このうえありません。

独断

「ぼくはその見解をとらない」でおしまいになるのですから。彼の主張は、最初から最後までこの調子です。マルクスの思想を頭からハネつけておりますから何一ついいねいに、書かれたまま読み、理解し、発展させようとしておりません。彼にはその必要もないこととなります。ですから、「折々の」資本論の参照とその読み方は『宣言』以上にデタラメです。(本誌前号 No.1345、10月1日発行号12、14頁参照)

たとえば、①マルクスによる環境危機の宣伝(42頁)、②第二四章の本源的蓄積(236頁)、第七節資本主義的歴史的傾向(141頁)、③物質代謝(158頁)、④価値論(285頁)、⑤ゴータ綱領、⑥ザスーリツチへの手紙(172頁)等の読み方、理解は斎藤君の読解力では手に負えません。案山子であるコモンとやらからの独断と偏見に他なりません。(滝野 忠・つづく)

◇読者からのおたより◇

マルクスの学説 再学習 50年前の丁度今頃(9月中旬)、教養部から学部に移行し、家族法(山島正男教授)の演習に参加することになりました。実定法としての家族法の判例を研究し、解

釈を勉強する前に、基礎知識として家族の歴史を勉強するように！という指導を受けました。モーガンの『古代社会』、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』、ベーベルの『婦人論』を読むことを課されました。また、シェイクスピアの『ベニスの商人』と、江戸時代の大岡越前守にみる裁判の在り方もテーマの一つでした。これらの書籍とりわけ『起源』は、50年経った今も、私にとっては益々重要な文献となっています。

『起源』におけるマルクシズムの「国家論」について、そして『宣言』、『反デューリング論』、『空想より科学へ』、『フオイエルバッハ論』、『ゴータ綱領批判』等々でも論じられているマルクス・エンゲルスの「国家論」を、自分なりに整理してみたいと思っています。時間がかかりそうです。

この50年間何回も読んできましたが、「理解の程度は？」であります。そして、レーニンの言葉を思い浮かべます。「国家の問題は、もつとも複雑な、むずかしい、おそらくブルジョア学者や文筆家や哲学者によってもつとも混乱させられている問題の一つだ」「国家の問題については、・・・エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』を読むよう、私は希望する」（「国家について」）、と。では。

（2021年9月16日 信州松本・中澤秀行）

思い出の郵便ポスト（黒く塗り替え 交通安全祈願） 今回の思い出の郵便ポストは、長野市豊野町大倉東交差点の丸型郵便ポストです。交通安全祈願の展示品です。黒く塗り替えてあります。当地も稲穂が出揃い、9月下旬には稲刈りです。コロナ感染拡大猛威、自助でしか生き続けられない。「ガマン」に耐えられない社会構造。

（2021年9月1日 長野県飯綱町・山浦隆芳）

9・11 タクシー歩道乗り上げ死傷 9月11日、東京・千代田区役所前の都道でタクシーが暴走、車道走っていた自転車や歩道の人を次々撥ね、街路樹にぶつかり停止、五人死傷という事故が起こった。この日は、東京・御茶ノ水駅「東海第2原発動かさないで！」の一斉行動に途中まで参加、慌てて次の会議へ。終了後I女性会議都本部事務局で、ほっとひと息ついたところで、事務局の方々の表情が急変し、「小林久美子さんが事故に巻き込まれ、救急車で運ばれた。家族との連絡が取れない！」と、あちこち連絡を取りはじめ、間もなく病院に飛んでいきました。区役所の国際平和男女平等人権課主催の講演が終了し、小林さんは講師のタクシーを拾おうと歩道にいて跳ねられたというのです。2時間ほどして、携帯メールが届きました。「出血多量で残念な結果でした。お兄さんや弟さんと連絡が取れ、病院にお見えになったので、医師から説明を受けました」と。

後日の朝日新聞に「取材に応じた弟は『まさか自分の（家族の）こととして起きるとは思っていなかった』と語り、無念さをにじませた。」と報道されましたが、私自身もこの2週間やりきれない気持ちで寝ても覚めても落ちつかず、同じ建屋でお世話になった菅原須摩子さんと山下俊幸さんらに電話したり、メールで交信したり、やっと心を落ち着かせることができました。（滝野嘉津子）

白鷺 家の前にひろがる田んぼの畔道に白鷺が飛んで来て、ちよつと挨拶を交わしたかの表情で、畔道をゆっくりゆっくり天に向かって飛んでいきました。直後にふと心に浮かんだのですが、久美ちゃんだったのでは…。

☆ 稲穂波 白鷺一羽 飛び立ぬ

（2021年9月13日 長野県佐久市・菅原須摩子）

菅原様の心のうち 白鷺に 小林久美子さんの在りし姿を重ねられた 菅原様の心のうちを 私なりに詠んでみました。大切な とても大切な方が儂くなられ なかなか胸の裡のざわつきがおさまらない毎日を 過ごされているのでしょうか…。

☆ 姿かへ 野辺の稲穂に 降り立ちぬ おもひ残しは 友すむ郷へ

（2021年9月22日 東京都武蔵野市・兼子千栄子）

その優しさに 小林さん、これからも元気に人生を楽しむことが出来たでしょうに、可哀そうでありませぬ。岩井章さんの没20年に合わせて小布施のお墓参りに一緒に行きましたね。国鉄闘争が終結した時、中里さんらと行った時にも小林さんが一緒でした。武藤久さん、朝日の中野さん、レオナルド熊さんらと福島の温泉に行った時の写真もありました。みんなに久美ちゃんと呼ばれ、闘争団とりわけ連帯する会の事務局にいた方々は、その優しさに接してきました。（山下俊幸）

久美子スマイル 長野県小布施の岩井章さんのお墓参りの思い出は一生残りますね。久美子さんの、あの何とも言えない笑いがもう見れないとは、ウフフフ、ウフフフ、ウフフフ、久美子スマイル。本当に残念です。（※『社会通信』No.1248号 2017年9月15日発行に掲載）（東京・葦輪泰臣）